虚空蔵山の蛇々物語（藍本）

藍の虚空蔵山に蛇がおるじゃげな
うそじゃげな　ほんとじゃげな　どうじゃげな

藍本の岩辻山の中腹に「虚空蔵さん」と呼ばれるお寺があります。春と秋には法要があり、たくさんの参詣者がおまいりします。この山の頂上近くには、磐座といって天の神々がおりてこられるという大きな岩があります。

ある年、何日も何日も雨が降らず、村人たちはほとほと困ってしまいました。村人たちは天を見上げては「雨を降らせてください」と祈っていましたが、一向に雨の降る気配がありません。村人たちはいよいよ困りはててしまいました。そこで村の長老の意見を聞きに行きました。

長老は、「霊験あらたかな虚空蔵さんにお願いしてみよう」と言います。さっそく村人たちは虚空蔵さんで雨乞いをすることにしました。

山頂では、護摩※を焚く準備が整いました。

護摩の中には牛の頭が置かれ、まわりをひばの葉で包み、火がつけられました。煙が立ち昇り、燃え上がる炎は天も焦がす勢いです。

太鼓やかねがにぎやかに打ち鳴らされます。

「雨よふれ。雨よふれ。」
「雨よふれ。ふらねば空をこがすぞよ。」
「雨よふれ。雨よふれ。」
「雨よふれ。ふらねば空をこがすぞよ。」
「虚空蔵菩薩様、雨をふらしめたまえ。」
「虚空蔵菩薩様、雨をふらしめたまえ。あなかしこ。あなかしこ。」
「雨の神様、龍神様、雨をふらしめたまえ。」
「雨をふらしめたまえ。」

人びとは何度も何度も唱え続けました。

雨乞いがすんで村びとがいなくなると、ふしぎなことが起こりました。

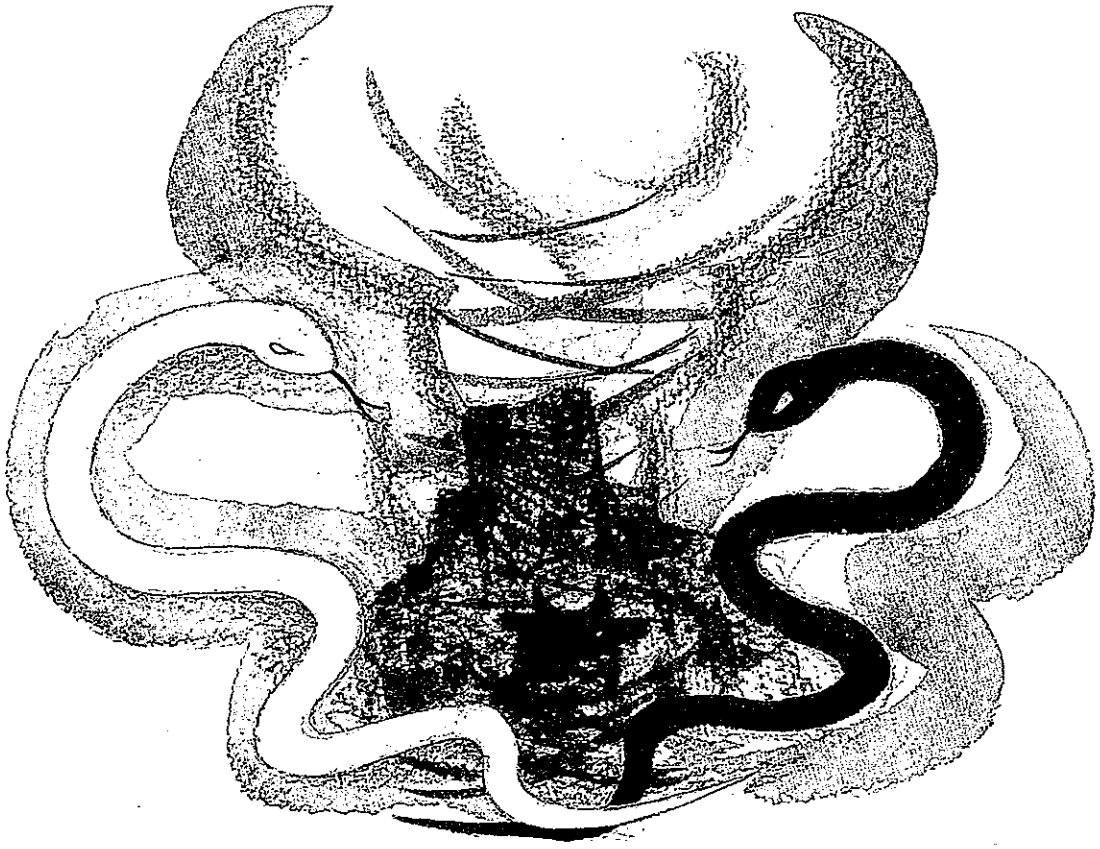
大きな黒い蛇と白い蛇がどこからともなく現れたのです。するとにわかに空がかき曇り、大粒の雨が降ってきました。枯れた田畑をうるおしてくれる待望の雨に、村人たちは大そう喜んだということです。

たまたまこの蛇たちの様子を見ていた二人の村人がおり

ました。この村人はその後、食べ物に恵まれ、幸せにくらしたということです。

また、二人のうちの病弱だった村人は、体が丈夫になり、どんな山でも鹿やイノシシのように自由自在に駆けまわるほどで、人びとを驚かせました。

このことから「黒蛇、白蛇に出会うと幸せになる。」と言い伝えられるようになりました。村人たちはますますこの霊験あらたかな虚空蔵さんをうやまい、家族そろっておまいりしたそうです。

藍の虚空蔵山は　宝の山よ。
岩辻山の谷や背に　大きな蛇がおるじゃげな。
どんな大きい蛇じゃった？
蛇の目傘か　番傘か。
白骨死体を　わしは見た。
身の毛がよだち　こわかった。

※護摩…仏教（特に密教）で、祭壇を設けて護摩木を焚いてさまざまな祈願をすること。